

青年海外協力隊に参加して

本学卒業生が、フレッシュャーズセミナーで講義

7月6日、生命・環境科学部 食品生命科学科1年次を対象に開講されている「フレッシュャーズセミナー」で、本学卒業生の野口なつ子さんが講義を行いました。野口さんは平成23年度に獣医学部応用動物応用科学科を卒業し、1年間北海道の自然環境関係のNGOに勤務した後、JICA（国際協力機構）が実施する海外ボランティア事業「青年海外協力隊」に応募し、「環境教育」の職種で難関を突破し、平成25年1月から本年1月までの2年間、中米のエルサルバドルに派遣され、首都のサンサルバドルからバスを乗り継いで6時間の山間の小さな町サンフェルナンドで市役所の環境課に所属し、同僚と協力して回収した生ゴミを利用して堆肥を作るコンポストセンターの運営管理、小中高対象の環境教育などの業務を担当した。

フレッシュャーズセミナーは、大学生生活の基本を学ぶことを目的にした授業で、卒業後の進路選択の参考となるように、食品関連を中心に幅広い分野で活躍する社会人を招いての講義を組み入れるなど、ユニークな構成となっている。その一環で、グローバル社会に対応するため、学生に広く世界に目を向けてもらいたいとの考えで、JICAの国際協力出前講座¹を利用して、JICA横浜に青年海外協力隊経験者の派遣を依頼し今回の講義が実現した。

野口さんは、青年海外協力隊の仕組み（応募から選考、訓練、派遣までの流れ）を説明した後、2年間活動したエルサルバドルの一般事情に加え、食べ物や国民性（物事にあまりこだわらない明るさ、友好的で親切、時間にルーズなど）、治安（都市部では殺人強盗などの犯罪が多いが、地方ではきわめて平穏）などを説明し、まず青年海外協力隊やエルサルバドルという国の理解を深めてもらうことから講義を始めた。

学生時代に行ったケニアで、マサイ族に弓や槍の飛ばし方や火の起こし方を教えてもらったり、ストリートチルドレンたちと遊んだり、野生動物を見たりして、こんなにすばらしい自然や動物、民族がこの世の中に本当に存在したのかと感激し、まだまだ自分の知らない世界がたくさんあると思ったのが海外に関心を持つきっかけとなり、1年間のNPO勤務で日本にいただけでは環境問題の

¹開発途上国の現状を知り、国際協力の必要性の理解深めるために、開発途上国で国際協力に携わってきた青年海外協力隊・シニア海外ボランティアのOB・OGや専門家、職員などを講師として派遣するJICAの事業。麻布大学では、本年度3回の出前講座を企画した。

本質が見えてこないと感じ、海外に出てその国の人と一緒に生活、一緒に環境問題について取り組みたいとの考えたのが青年海外協力隊応募の直接の動機だったと語った。

現地での具体的な活動内容、活動がなかなか上手く進まず苦労したこと（言葉の壁、異文化適応など）を説明した上で、それでも 2 年間の青年海外協力隊の活動を通じて、①相手も自分も受け入れること、②適当になる（頑張りすぎない、小さいことは気にしない）、③チャレンジする勇気、チャレンジすることは楽しい、④多くの人との出会いが自分を成長させた、といった多くの事を学んだと報告した。

2 年間の活動を経験して、ボランティア活動は一方向的なものではなく、お互いが協力し合うことによって生まれるつながりや感謝の気持ちという報酬、新しい発見や気づきを得る自己実現の場であると感じていると話し、最初は、エルサルバドルの人たちのために何かしたい、何かを伝えたいとの思いが強かったが、自分がエルサルバドルの人達に支えられ、多くのことを教えてもらう事が多く、現地の人との協力なしにはなにもできなと講義を締めくくった。

最後に、野口さんは麻布大学の先輩として、『世界に目を向けることで今までと違ったものが見えてくる。今日の講義をきっかけに、海外や途上国も含めたより広い選択肢を目指して勉学に励んで欲しい。』と学生たちに呼びかけた。



写真①：動物応用学科卒業生野口なつ子さんが講義する風景。



写真②学長への表敬訪問：左から平准教授、川上学長補佐、JICA OB の今津先生、浅利学長、野口さん、代田学科長、黄教授



写真③：理事長への表敬訪問：左から柏崎理事長、野口さん、今津先生



写真④：出身教室の先生と歓談：左から今津先生、野口さん、塚田准教授、南教授